

このような中で、両方のレベルを横断する役割を担うのが「メタデータ」である。メタデータは、コンテンツを分類・整理するために用いられるとともに、コンテンツの主題を記述する単語やフレーズも使うことで、コンテンツを検索しやすくするためにも活用される。いわば、メタデータの管理がファインダビリティ向上のための鍵を握っているとも言えるだろう⁽²⁾。

2. タクソノミーからフォークソノミーへ

元来メタデータとは「データのためのデータ」のことであり、対象であるコンテンツに対して内容や属性となる索引やキーワードなどを付与する行為を意味している。いわばコンテンツに対して「タグ付け(タギング)」を行うことであり、従来からのタグ付けの基準には「タクソノミー(taxonomy)」による情報管理が採用されてきた。タクソノミーとは、ものごとを分類して理解するといった、人間の意識の根底にある分類体系としての階層構造に従って、コンテンツ管理者が予めタグ付けを行うために用いられている。

それに対してフォークソノミー(folksonomy)とは、「folks(民衆,人々)」と「taxonomy(分類法)」との造語で、インターネット上のコンテンツの利用者である閲覧者や投稿者自らが、閲覧・投稿するコンテンツに自由にタグ付けすることで、検索のためのシステムに役立てることを表す。フォークソノミーが従来のものと大きく違うのは、タグを付けた人の個人的な思い入れや、一定のコミュニティによって認められたタグ付けであることから、タグを介してさまざまな利用者やコミュニティの関心を共有でき、情報検索の方法を学ぶことができる点にある。また、タグ付けにおいても、個人の感覚や印象によるものやコンテンツに対する事後的なアクションを付与するなど、人の感覚や時間のような従来になかった属性を採用できることにも特徴がある。

フォークソノミーによるタグ付けの効用は、利用者が任意のキーワードを検索する際に、他の利用者がタグ付けを行ったコンテンツを検索結果に表示できることで、検索性が向上していくこととされている。また、タグの多さに応じて文字列の大きさを変化させて表示する「タグクラウド」を用い、タグの人気や優劣を示すことで、あらたな検索行動を引き出すことにもつながる⁽³⁾。

3. フォークソノミーの応用分野

フォークソノミーが活用されている分野には、ソーシャルソフトウェアとも総称される一連のサイトサービスがある⁽⁴⁾。代表的なものに、多くの人々が写真を共有する『フリッカー(Flickr)』⁽⁵⁾や、興味あるプロ

グ記事やニュースへのリンクを共有するソーシャルブックマークの『デリシャス(Del.icio.us)』⁽⁶⁾、ウェブページのアーカイブサービスの『ファール(Furl)』⁽⁷⁾などを挙げることができる。現在では、コミュニティ・ブログの『メタフィルター(MetaFilter)』⁽⁸⁾やブログ・インデックスの『テクノラティ(Techmorate)』⁽⁹⁾でも活用されている。また国内でも、『はてなブックマーク』⁽¹⁰⁾に代表されるソーシャルブックマーク・サービスがよく知られている。

ビジネス分野においては、企業のウェブサイトやイントラネットでの採用が活発化してきた。ウェブサイトでは、コンテンツに対する利用者のさまざまな傾向を掴むことができ、製品やサービスに対するマーケティングデータとしての利用が進んでいる。たとえば、特定の製品に対してどのような言葉が用いられているかをチェックすることで、製品コンセプトの見直しや開発に活かす等である。またイントラネットでは、企業内の情報を従来からの事業別や製品別の分類方法に加えて、従業員の行動やその時々嗜好に基づいた情報分類が可能になることで、検索性の向上と同時に従業員の興味などを把握できる効果につながっている。

学術分野では、米国を中心に図書館や美術館などでの実践の取り組みが急激に進展してきた。米国ミシガン州アナーバーの地域図書館における情報検索システム『SOPAC(Social OPAC)』では、アカウントを持つ利用者が書誌データにタグをつけることで、利用者の嗜好や人気度から図書情報を検索することができる⁽¹¹⁾。また、メトロポリタン美術館やグッゲンハイム美術館などを中心とした米国の8つの美術館による『アートミュージアム・コミュニティ・カタログング・プロジェクト(The Art Museum Community Cataloging Project)』では、これまで個別に行ってきた館内の作品に対するメタデータを統合する試みに加え、各ウェブサイトを紹介して来館者が個々の作品にタグ付けを行うことで、来館者が作品を見つけだしやすくするための研究が進んでいる⁽¹²⁾。

4. フォークソノミーの課題

フォークソノミーをファインダビリティ向上に活用していく上での課題には、一般の利用者によるタグ付けに際して、言葉における曖昧さや正確性に関する次の点がある。たとえば、同義語や多義語を多数入力してしまうことや利用者の勘違いから無意味な言葉を入れることは、利用者にとっての検索能力を著しく下げってしまう結果につながりかねない。同時に、サイトの運営者にとっては、好ましくない言葉が付くことに対する管理面での問題が浮上することになる。

これらの課題の克服として、タグ付けの入力の際に

同義語や多義語などを整理するためのエンジンを併用することや、利用者に対して積極的に意味のあるタグ付けを促すための仕掛けを講じる策などが試みられている。たとえば、Google社によるGoogle Image Labelerでは、ゲーム形式で利用者に画像のタグ付けの精度を競わせながら、より正確なタグ付けを促す仕組みとなっている⁽¹³⁾。その他にも、タグの利用頻度による変化を表示するタグクラウドにおいて、時間軸の要素を付加することで、タグ付けの適性を収斂させていく試みがある⁽¹⁴⁾。

フォークソノミーは、従来からの制限語彙によるトップダウン型のタクソノミーに比べ、分散されたボトムアップ型のアプローチであることから、コストをかけずに効率的に運営できる大きなメリットにつながっている。そのことから、フォークソノミーは従来からの手段を補完しながら、利用者にとっての情報のファインダビリティ向上を実現する方法として、今後より一層注目され、普及していくに違いない。

(ソシオメディア株式会社：篠原^{しのはらとしかず}稔和)

- (1) Rosenfeld, L. et al. (篠原稔和監訳) Web情報アーキテクチャ. 東京, オライリー・ジャパン, 2003.
- (2) Morville, P. (浅野紀予訳) アンビエント・ファインダビリティ. 東京, オライリー・ジャパン, 2006
- (3) Guy, M. et al. Folksonomies Tidying up Tags?. D-Lib Magazine. 12(1), 2006. (online), available from <<http://www.dlib.org/dlib/january06/guy/01guy.html>>, (accessed 2007-1-31).
- (4) Hammond, T. et al. Social Bookmarking Tools(1): A General Review, D-Lib Magazine. 11(4), 2005, (Online), available from <<http://www.dlib.org/dlib/april05/hammond/04hammond.html>>, (accessed 2007-1-31).
- (5) Del.icio.us. (online), available from <<http://del.icio.us/>>, (accessed 2007-1-31).
- (6) Flickr. (online), available from <<http://www.flickr.com/>>, (accessed 2007-1-31).
- (7) Furl. (online), available from <<http://www.furl.net/>>, (accessed 2007-1-31).
- (8) Metafilter. (online), available from <<http://www.metafilter.com/>>, (accessed 2007-1-31).
- (9) Technorati. (online), available from <<http://www.technorati.com/>>, (accessed 2007-1-31).
- (10) はてなブックマーク. (オンライン), 入手先<<http://b.hatena.ne.jp/>>, (参照 2007-1-31).
- (11) The Ann Arbor District Library. (online), available from <<http://www.aadl.org/>>, (accessed 2007-1-31).
- (12) Bearman, D. et al. Social Terminology Enhancement through Vernacular Engagement: Exploring Collaborative Annotation to Encourage Interaction with Museum Collections. D-lib Magazine. 11(9), 2005, (online), available from <<http://www.dlib.org/dlib/september05/bearman/09bearman.html>>, (accessed 2007-1-31).
- (13) Google Image Labeler. (online), available from <<http://images.google.com/imagelabeler/>>, (accessed 2007-1-31).
- (14) Weisinger, D. "Metadata: Folksonomy and the Art of Tagging in the Enterprise". Formtek Blog. 2006-12-13. (online), available from <<http://www.formtek.com/blog/?p=157>>, (accessed 2007-1-31).

CA1624 次世代の図書館サービス？ Library 2.0とは何か

猫も杓子も「2.0」

近年、世界のIT業界・ビジネス界を席卷した言葉に「Web 2.0」がある。これは2004年頃、当時急速に発展・増殖していた新世代のウェブサイトをも総称する言葉として生まれた。具体的には、オンライン地図ツール“Google Maps”(CA1607参照)やオンライン書店“Amazon.com”, 画像共有サイト“Flickr”, オンライン百科事典“Wikipedia”といったサービス、またより一般的にはブログ、RSS、タギング(フォークソノミー; E595, CA1623参照)といったツールや機能など、利用者の参加(participation)や相互の協調(syndication)を基盤にしてコンテンツを提供するウェブサイトが、Web 2.0に当たるとされる⁽¹⁾。そして、これらより以前のウェブサイトは、「Web 1.0」と呼ばれている。

ソフトウェアのバージョンアップになぞらえたネーミングの妙もあってか、このWeb 2.0という言葉は、ウェブの世界の外側にも急速に広まった。同時に、単に技術要素だけではなく、参加・協調といった中心思想や、「従来の「1.0」は時代遅れであり、新しい「2.0」の波に乗り遅れてはならない」といった流行の意識をも含む、幅広くあいまいな概念に成長した。そして周辺領域に、「何々 2.0」という派生語を、真面目なものから戯れのものまで多数生み出した⁽²⁾。このような「2.0」の一つとして、図書館界に真面目に導入されたものが「Library 2.0」である。

始まりはブログから

「Library 2.0」という業界用語(buzzword)が初めて使用されたのは、2005年9月26日、米国ジョージア州グイネット郡公共図書館(E513参照)で技術サービス部長を務めるケーシー(Michael Casey)のブログ“LibraryCrunch”だとされる⁽³⁾。これ以後、Library 2.0という用語、またLibrary 2.0とは何か、何をなすべきかについての議論は、瞬く間に図書館ブログ界に広がり、さらには、実社会にも乗り出していく。ブログ界の論客たちによるシンポジウムや会議の開催、新兵訓練(Boot Camp)と称した初心者向けワークショップの実施など、2006年には米国を中心に世界各地でも多くのイベントが開催されている。

百家争鳴

しかしながら現在に至るまで、Library 2.0には、確